

高度デジタル化社会の未来に向けて

田中 洋美

街中で移動中や待ち時間にスマホを触る人の姿が日常の風景となった。デジタル機器に囲まれ、常時オンラインでいることはもはや珍しくない。しかしインターネットが普及し始めてから30年足らず、スマホに至ってはまだ15年ほどだ。この急速なデジタル化の背景には、SNSの利用拡大、ビッグデータの誕生、それを処理可能なコンピュータや深層学習などの高度な人工知能(AI)の開発といったデジタルテクノロジーをめぐる変化がある。

新しい技術が登場すると、しばしばその便利さが強調される。確かにデジタル化によって私たちの生活は便利になった。コロナ禍で対面での接触が制限される中、親しい人とのコミュニケーションやリモートワーク、オンライン授業、デジタル配信の娯楽メディアコンテンツの視聴など、デジタルテクノロジーの恩恵は(そしてそれらを可能とするサービスを提供する企業の利益も)計り知れない。

しかしながらデジタルテクノロジーが社会や人間に与える影響については懸念もある。国家や企業による個人情報の扱いや監視、プライバシーの問題がしばしば論じられている。また他者と常時つながることが必ずしも孤独の解消にはならないという指摘もある。ジェンダーの視点からは、デジタルテクノロジーが女性や性的マイノリティが遭いやすい被害を助長してきたことを看過することはできない。SNSは、#MeTooのようなエンパワーメントだけでなくミソジニーやホモフォビアに基づく暴言やストーキング、性的画像の送信にまつわる嫌がらせや性的行為の強要などの問題ももたらしてきたのだ。

被害者には未成年も少なくないが、これまでのところ事業者側の取組は限定的である。今必要なのは、商業主義、技術中心主義ではなく、誰もが信頼でき、安心して利用し暮らせることを第一とする意識の醸成である。そのような意識が、技術開発やサービス提供に携わる側も含め、広く社会に浸透することを願ってやまない。



PROFILE

たなかひろみ：明治大学准教授。専門はジェンダー研究・文化研究・メディア研究。博士(社会学)。メディア、テクノロジーと社会の関係についてジェンダーの視点から研究。近著に『〈みる／みられる〉のメディア論』(共著、ナカニシヤ出版、2021)、『クリティカル・ワード メディア論』(共著、フィルムアート社、2021)、『デジタル社会における多様性と創造性(仮)』(共編著、明治大学出版会、近刊)など。